

○樟蔭東女短大 吉井 典子 大阪城南女短大 喜多 智子
桜井女短大 田中 暎子

目的；本研究は、高齢者の終末介護の現状と問題点を考察することにより、より豊かな人生の終末期を迎えられるよう、また、介護者の負担の軽減に寄与しようとするものである。

今回、在宅で介護を受けている人に焦点をあてたのは、①在宅で介護を受けている高齢者に関する調査は極めて少ないこと、②施設入院による終末介護が増加しつつある現状にもかかわらず、在宅での終末介護を希望する高齢者が多いこと、③介護を受ける側にも、する側にも負担になる「おむつ」使用に改善すべき点があると考えられるためである。

方法；女子大の学生が自分の家族や身近にいる介護を受けている高齢者について、介護している人に対面調査をした。主な調査内容は、学生およびその保護者の高齢者に対する意識、高齢者が介護を受けている場所、「おむつ」使用の有無、「おむつ」使用に関する改善すべき点等である。調査時期は1994年11月～12月。回収件数は393件であった。

結果；①介護を受けている場所が在宅59.1%、病院22.1%、特別養護老人ホーム11.0%養護老人ホーム5.1%となり、在宅で介護を受けている高齢者が6割近くを占めた。施設等入所者については、次回に報告したい。②在宅で介護を受けている人の内、「おむつ」を使用している人は61.3%、介護を受けている期間は1～2年が最多で、10年以上の人でも0.9%であった。③在宅で介護をしている人の内、男性は4.4%と少なく、高齢者の介護は女性の肩にかかっている。その年令は、45～54才が最多で43.4%を占めている。また、70才以上で高齢者を介護している人が11.8%もいたことは考えさせられる現実である。また、「おむつ」使用における問題点についても検討した。